

随想 責任について

中小企業経営者の覚悟から学ぶ

加藤 宏光

五月九日朝日新聞の天声人語に面白い記述があった。少々長くなるが、以下はその引用である。

先ごろ、私鉄の車内放送に感心させられた。『次は○○』に続いて『降り口は右側です』とでも言うところを、『右側のドアを開けます』と妙に力強い。『私が』の主語はなくても責任感がにじむ言い回しだった。これが頼もしく響くのは、世に『ひとごと調』があふれているからだろう。原発事故をめぐる言説もしかりだが、珍しいことに、当事者の覚悟が透ける言葉を管首相から聞いた。浜岡原発を丸ごと止めてくれという要請

である。：中略：備えに万全を期すのが常識である。首相は正しい。ただ『俺が止めた』という実績を急いでか、夏の電力不足やエネルギー政策への影響をつぶさに吟味した様子はない。：中略：危急存亡のメッセージは、内容と同じほど発言者が重い。機長のアナウンス一つで、機内のパニックは収まりも広がりもしよう。乱気流のただ中で、彼の技量や人徳を論じても始まらぬ。せめて命がけて操縦桿を握り、ぶれない主語で語れと、揺られながら祈る。

普段より大企業や大きな組織(公的なモノを含む)の指導的立場にある人物像に責任感が薄

いと感ずることが多かった。この印象は3・11大震災に引き続く原発事故に際して、『まったくその通り』と実感させられる毎日が続く。朝日新聞の記者もそれゆえにこのコラムを書いたのであろう。

代表的な例を挙げれば

1) 原発事故の数日後、一号機の水素爆発に引き続く放射能漏れと立て続けの建屋爆発に恐れをなした東電幹部が『東電社員全員に引き上げ』指示し、管理を国に移管しようとしたこと(川俣会長、清水社長はそうではないと弁明しているというが：)

2) 興味半分に爆発した原発を視察にきた管首相(本人はそれが現場の対応にどれほどの悪影

響を与えたのかを実感している様子もないが：)

3) 一部が屋内待避のエリアとなつたいわき市の病院で、出張中の院長が、患者を置き去りにして自分だけ安全なエリアに退避したこと

4) 同じく一部が屋内退避のエリアとなつた田村市で町長が真先に圏外に退避し、屋内待避エリアであるにもかかわらずエリア外への自主退避を市民に迫ったこと

5) 宮城県の大津波被災地にある病院で、患者を置き去りにして医師が全員退避し、看護師が一丸となって患者のケアを続けていること

等、枚挙に暇がない。

「組織のリーダーに課せられた役割とは何なのか」を改めて考えさせられる。生業として会社を維持している中小企業のオーナー社長（経営者）にとつては、組織が人生そのものである。それを失うことは命を失うに等しい。しかし、大企業や公的な大組織の幹部あるいは政治家にとつては、立場は生活の糧を得る手段であり、生き甲斐とは言えないのではないか、とさえ思われる。

前回少し触れた《想定責任》を考えた。 「想定外でした」

という言い訳を原発事故以来何度聞かされたことか！ これだけ想定外が続くということは、想定そのものに問題があったと断じざるを得ない。想定基準が甘かった、ということである。想定は、守るべき限界を設定するためにこそある。であるから、リスクを回避できない想定はそれそのものが問題を内包している。そしてその想定をした者には相応の責任が生じる。

「想定外でした」と言っている責任がなくなると思っているのかのように、しかも平然と言っている

けられると「想定責任」はどうなっているのか、と問い掛けたくなるのは著者だけではない。想定外といつて想定者に責任転嫁するエセリーダーたちも組織の持つ社会責任を、人生を賭けて取ろうという気概を持っていないことは明らかである。大組織ほど、《後は野となれ山となれ》が通用する社会であったは困る。

五月十八日の朝日新聞に、社長の平均月給は四二〇万円と出ていた。大企業の社長と中小企業の社長とでは二倍の格差があ

り、それによる概算では、前者では年俸五、五〇〇万円を超え半面、後者では二、七〇〇万円ほどになる。

身代を賭けた中小企業の経営者が取る年俸が二、七〇〇万円（それも、取れる人と取れない人の格差は大きい）であるのに対して、経営責任の自覚は前者が比肩しようもあるまい。文字どおり命懸けで経営を維持する中小企業経営者の覚悟を大企業のリーダーたちも見習ってほしいものである。